重修新譯蒙賊記

五

へ 13
3298
5止

蒙賊記第五

鎮西海岸警衛の事

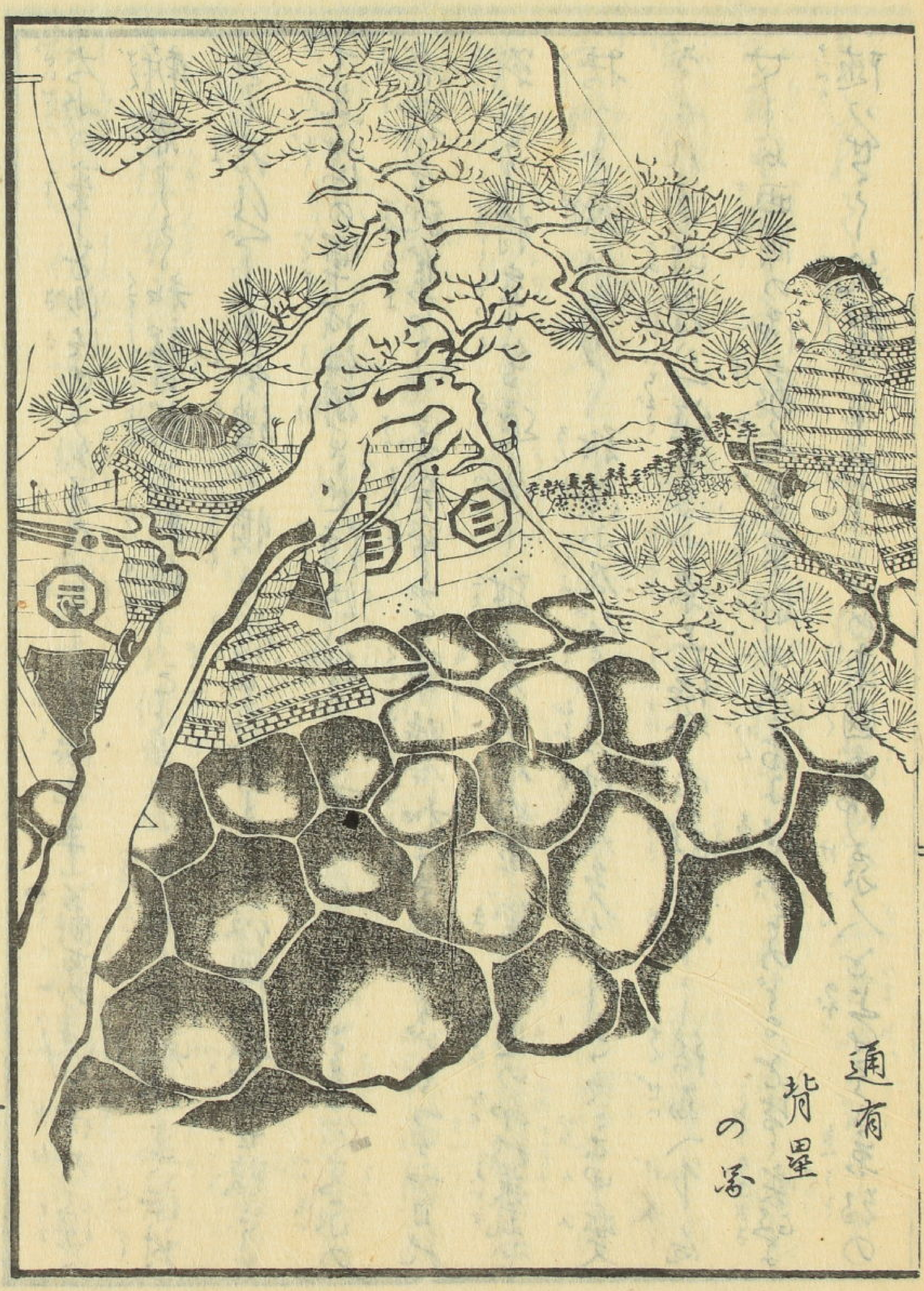
蒙古國兵卒を募り求めし程に十萬に及びける蒙国の諸軍を加へて其勢幾十万ともはかりがたし数萬の戦艦を浮べて寄せ来るよし其噂止ざりけり怖るゝ者を恐し怖るゝまでなき者おそれざる者もおるべくして些くまじき事なれば騒擾たちては小人の習ひなるべくとおもしく此蒙古の事ハ先の年の合戦より聞おぢしく其妙法の術ったり又あるまじき蛇足を附會し彼國にハ奇術幻法ありて風をおこし浪を起し神通不思議の働きあれバ尋常の合戦にてハ討勝つ事もかなひがたし又大なる珠玉の中に小大を

大正十年八月廿九日寄贈 本大學出版部

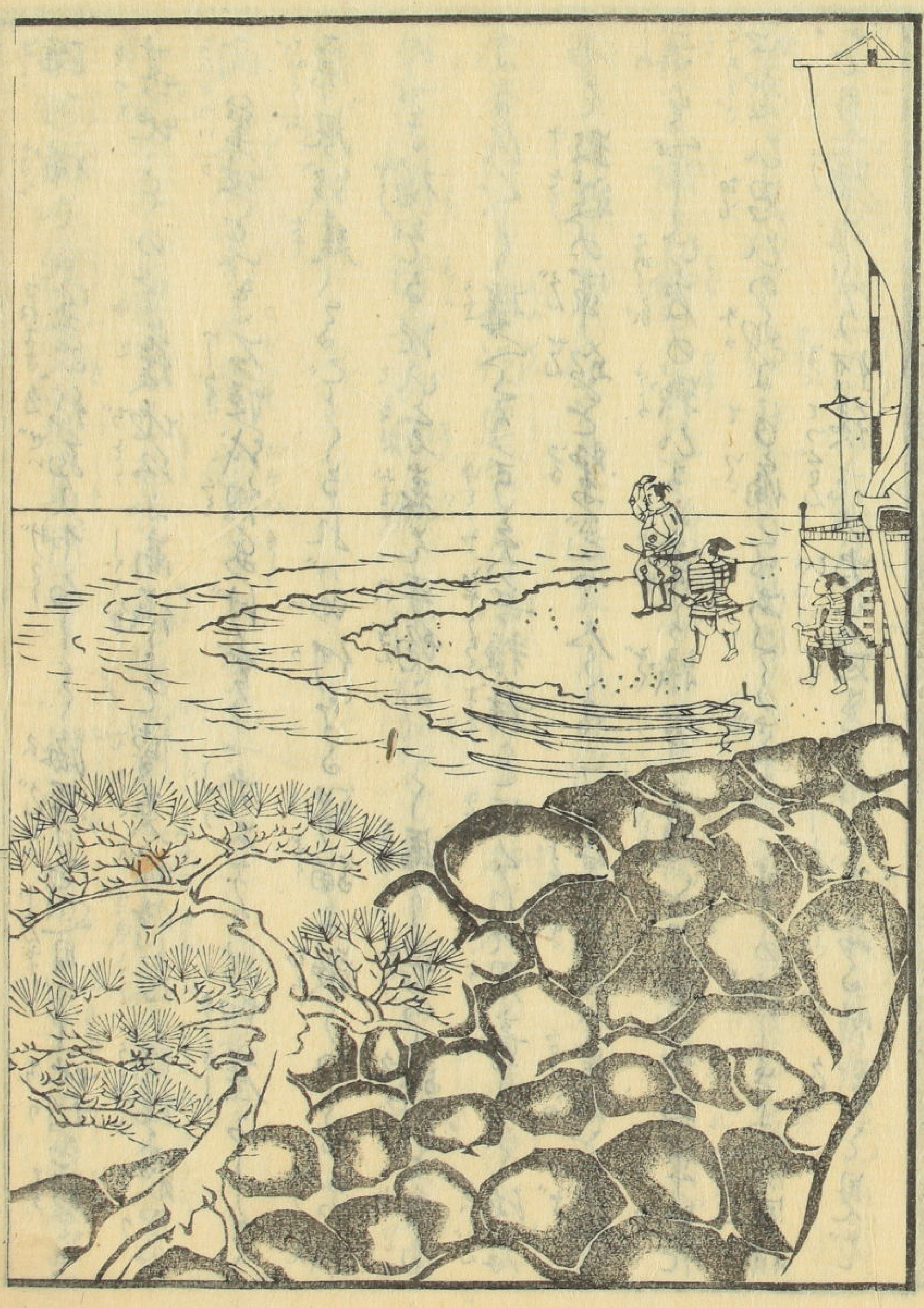
3298 5

包まれて空中に飛せて弾き鉄まで其響鳴動して
爆落をなし是にも当る時ハ筋骨砕けて即死する事偸も
雷に討るゝが如し太刀長刀の力を尽し一切結ぶとも打払ふとも
奇術に敵対なすべからず行末いかゞならんと言ひ懼すもの
あまたに及び聞怖する者将少なからしむ頽を扱ひしハ下々の物議へね
こゝろなき武士の家にあるものを何ぞ於ハ吹て押そるべき西国辺
乱防と憚き所業し懐て其晴く東国へも寄より並び寄る
事あらざらん稀く當つて懲しめんと手ぐすね引く待ちける
さても蒙古の軍ハ建治三年五月北条武蔵守義政執権の連署を
辞職して信州塩田郷に閑居せしかバ相模守時宗一判にて

大小の事を沙汰せられたりしが建治元年蒙古の使を由井ヶ濱の
斬罪して和親の縁を断絶しけるゆゑバ我国より航海して征討
をも為すべしと無禮を憤り憤られけるまで彼国を悩まし
て無謀の軍を仕掛させ待ちたく様で有らんとするさま文永の
合戦を馳集まりし実合都にて軍略合和せざりしかバ去る一日も
戦ひより将卒皆退屈し殊に乱れぬ軍気にて思の外英気と
挟くし戦ひなく雖然小及び手負討死多かりしこそ云甲斐
なかれとて此度ハ一族なる小弐上総介実政に命じ鎮西へ下向
せしめ西国の御家人皆京都の大番に従ふものども悉く実政に
随ひせて筑紫に下らしめ東国の御家人とよせて京都の



通有背塁の図



跡を補ふる実政殊勝にや向して海岸を巡見し地利を計りて
其地〳〵の守護地頭に商議して博多箱崎の海端に数里が
間築地をつき石垣を組あげたり一丈あまりの切崖にして
屏風を建たるごとくなれバ如何なる蒙古も乗越
ぬべき様ぞなき此方表ハ平坦にして馬の乗引を自由
にならしむべく構へたり弓矢兵粮等を備へ置て海岸
に数艘の軍船を繋ぎて今もこゝに寇来るが皇威を畏れ賊は
ゆるさじ此度の戦ひは第一に賊等に後をとらせじあらん敵軍器に
心を砕ひ思ひの外に手を痛くあてざらし未の悔しきに今ハ軍楼
を見ん瞭しなり何鉄丸の火を放もん押寄来る帆影を見んぞ

速やかに軍船をも乗出し賊徒が船に乗うつり鏖にせんものと
各〳〵すゝんで待うけたり萬國に比類なく忠勇を先として
義を識り恥を忘れざるものゝふなる武国の風こそ天晴目出度
事にハあなりけれさるにても此年月を何となく騒がしかりしに
今日にいたり其沙汰ましく聞えけれバ禁廷よりも勅使を立
られ諸社諸寺の神仏に御祈願をこめさせて降伏すべくぞ
祈らせたまふ

虜軍大挙襲来る事

弘安四年五月廿一日蒙古ならびに先隊征東元帥忻都洪茶丘等の
賊船数千艘壱岐対馬をさしてぞ押寄たり是まさきに高麗ならび

兵船数百艘綻びもなくつゞけて壱岐に着岸し一手ハ對馬に
上陸し大勢陸路よりよせてひしくと諸人を殺し刺ころし
老幼のきらひなく手あたりしものを斬撃しく其横暴ある
かぎりは海岸近き居民等ハ逃るゝひまなくして太宰府に
訴れけり八十あまりの病身を引連て山の奥谷の底に隠れ潜んで
遁るゝまでもあはてし親に引はなれて呼べども一ツ所に泣き叫ぶ
其声を聞つけて尋ね求めて殺し去り暫時の命をしのぐれバ
とて可愛き子を我手に縊て刺殺して隠れ居り子を
失ひし親たるもの何時までか生ん命をもて斯る憂目を見るやと
歎き悲しむぞ哀れなる遂に沖合には幾千艘とも数

知らぬ森のごとくに連なれる兵船對馬の方に寄ると見へけれ
對馬にも寄せしかバ宗家ハ海路より攻寄侍の西より南まで
一ツの湊志賀の島に着するに二ツの湊を見渡して寄て
数艘を待合せて一手になりて押寄んとの為なりし武器
兵糧をつみ及び鋤鍬鎌を始めとして農業の雑具を数艘
の船に積みてあり必定軍に討勝て住附べくや打もひけん一切の
雑具ありて何不足なく財へきなり
真清宴を草せるにあたり筆を投じて古史ハおきを
漁り新書を多くもとめ益なるは我師琢齋先生
博学強記和漢の群籍を探索し殊に公命を奉じて

得がたき紀史を比見し疏き書をも見ん凡此事に拘れる事ハ虚実
を論ぜず新古を嫌はず輯載して遺るなし然るに
此壱岐對馬の戦ひにおいて我皇國の戍兵寡くして麗氏の
擾乱を除き挙て残徒を討し事を記されざるハ古史に備る
事なき紀が故なり執柄相州防海の軍略に深く心を用ひられ
たるに豈此二島を棄て省みざるの謂あらむや絶地孤島
の事なれば殊更に固衛を計り将卒を撰定し戍兵を
置れし事必せり東國通鑑曰五月戊戌忻都茶丘及金方
慶朴球金周鼎等以舟師征日本辛酉忻都茶丘金方慶
至日本世界村大明浦使通事金貯撒諭之金周鼎先與

倭交鋒諸軍皆下与戦即将康彦康師子等死之諸軍
向一岐島船軍一百十三人梢工三十六人遭風失其所之
遣郎将柳庇告于元又六月金方慶金周鼎朴球朴子亮
荊万戸等与日本兵力戦斬首三百餘級日本兵突進官
軍潰茶丘棄馬走萬戸復横撃之斬首五十餘級日本
兵乃退茶丘僅免翼日復戦敗績云云忻都茶丘等累
戦不利とあれバ按ずるに是二島の戦ひなるべし其中ハ
官軍潰しも累戦不利なるもあまでに手痛く当りおいて度々
敵軍せし事明かなり然るに我邦の史冊にハ此事を載せ
ざるを千載の遺憾とし以て爰に記する絶島の戍役しるく

牧策ハ強虜を破て尺地も夷賊の有とならざりしハ莫大の
勲功なるに其事愿をとぶに詳らかに書も留めざりしハさハ
云へ自らいへる風説にして言痛く虚飾を加へ副て自ら
尊大に言ひ傲ぶる外国異邦にくらぶれバ代々の無知なるも
伐らざるを目出度しとも愛でゝ貴しとなすべきなれ
限りもなうしむべしや

さても筑紫の海岸ハ夥しく梓弓朝より朝したる
事なれバ遙に寄る賊船を居るが待人と言ひ甲斐なし
打ちおんと勇しめきて勇みなりしが有様なれバ眼にあまる
大軍に早まて勝負たんなきまで上総介実政

命令を下して寄来りなバ矢頃近くなりて射て落し討て取べし
とて塀の内にはてだれの精兵を撰みつゝ城戸差堅めて要害
厳しく待かけたり柵をさんなに堅固なる我備へにや相備しれ
志賀ノ嶋の海浜に船数多く寄来らん乗せ来しえ暮果ぬれバ塀の
上に篝火数多焼たゞけ白昼のごとく輝かし用心堅固に守護
せりかくして後に草野治郎恒長ハ今日寄来りし賊船
居ながらこゝに松浦潟月も傾く深夜の闇を夜討にこそ屈竟なれ
人数を先登し賊将の首斬て血祭に供へて呉んと手勢を
まとめて船に打乗て敵も知らぬ沖中を志賀浦にかゝり
たる敵船と同じ目当として案内知りたる海路なれバ操た

揉で漕立たり合備への御方の軍卒其様子を窺ひ知りて
何かハ少しも猶予すべきといふて矢野も劣らじと同じく乗出し
押立て後れじと追て揉に漕せ来りかくて治部恒長も程よく
敵船に漕寄て時の声を発し当るを幸ひ斬て廻れバ
賊徒共も大軍を頼みにて夜討の用心更になく急を果し
起りたれバ泣てのみにて仰天し周章に騒ぎて防ぎ戦ふ義勢
なく開き靡て逃亡る心利たる者ありて手早く焼草を放ち
敵より御方の軍船に逃て乗寄せ来りぬれバ闇夜の事なれて
賊船ども八勢ひ多分の討しまれ八己が船を用心して際に窮し
討て逃しがたかりし治部恒長思ひのままに打傷く粋し延まで

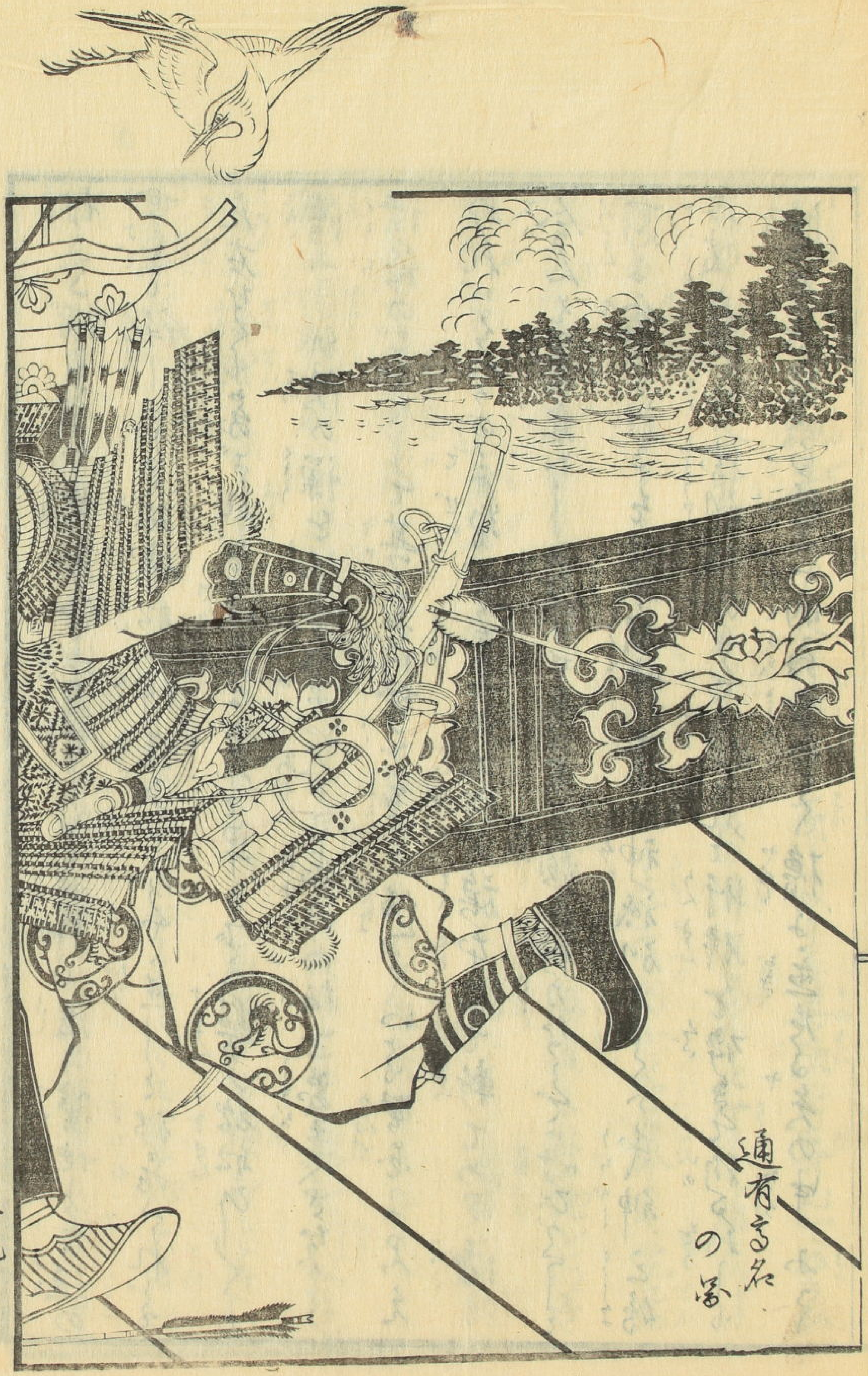
斬て廻るに櫓に放ちし火の手廻りて燃として船より瞬く
間に油船火となりぬまぞ手勢を團めて我船に乗移る程に
友船も己が船に火の移らんと怒て漕開かんとする際に漕立
こぎ立御方の陣へ帰りけり斬捨たるもの八首を分ちて討取首数
二十一大将は実検に入れしか八目覚しかりける次第なり

河野通有高名の事

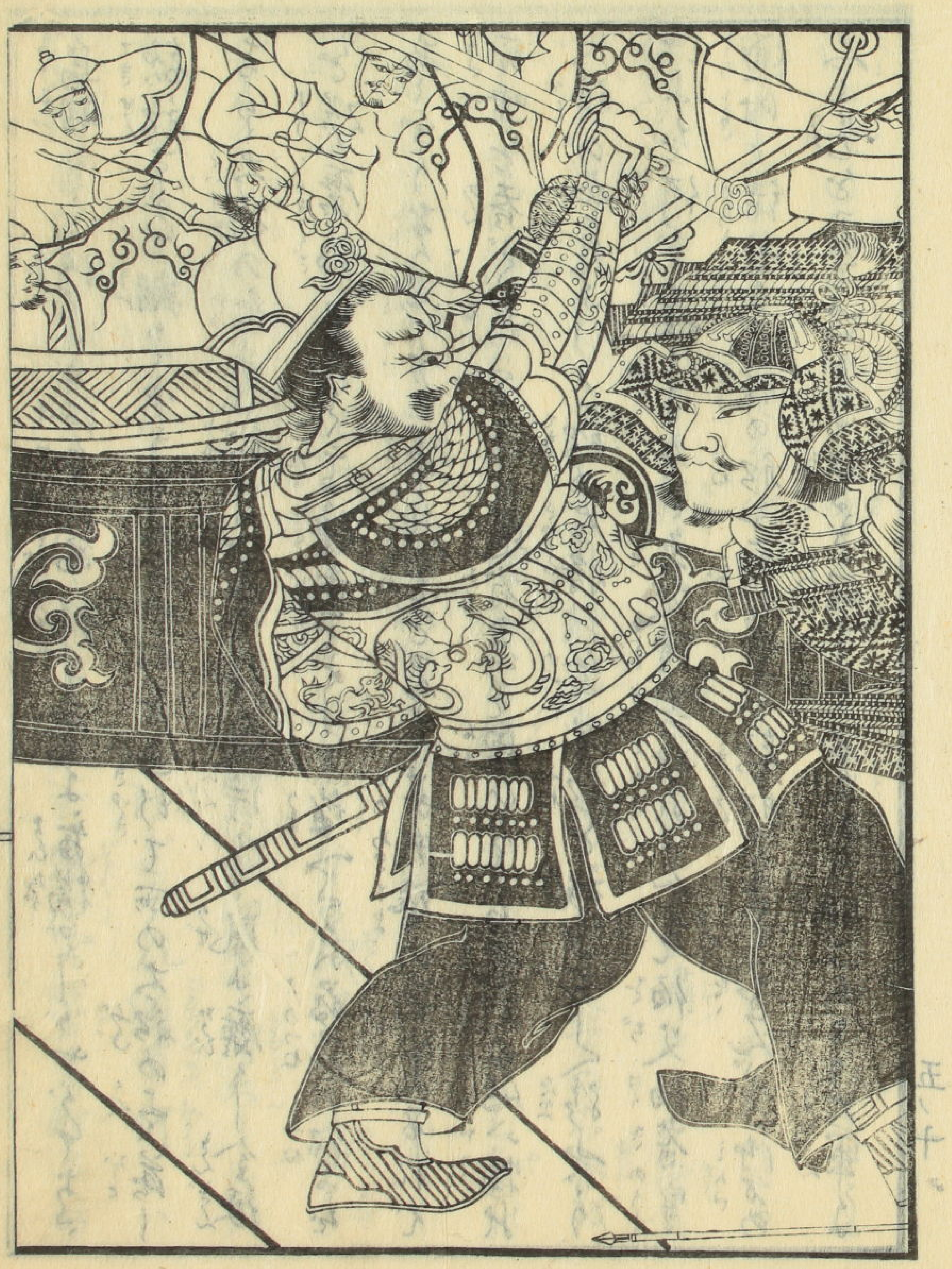
伊豫國の住人河野六郎通有ハ此八ヶ年以前より氏神の社に
祈願して曰く此十年の中に異賊来らバ忠戦して討取る
為し若来らずバ異國へ押渡り合戦して討従へ此起請を
守らせ給へ心変りハいたすまじとぞ数十枚の起請を書てあ

三嶋の社頭神前にて火に焼て灰となし其灰を呑んで誓ひ
奉りしかるに今蒙古の大軍筑紫の沖に寄ると聞て誓ひし
神の恵みなりとて躍り揚つて軍さ五ヶ国を進發して筑前
博多に着陣せり其浦にあらて見るまで海濱に築地をつき
乱杭をうち逆茂木を植て要害厳しく構へたり通有は此所
をかたく守り堅固に要め居るだん敵は恐れて近寄らず十分に
敵我引請ひげる名を成しけり我れただやすく敵を引受
快く接戦して勝負を一時に決すべし要害を頼むときは
士卒の心一致せずしてかへつて必死の地には至らじとて築地に背き
陣を取り石垣を後ろに当て海の表には家の紋付たる幕一重

打たるばかりなり是を人々嘲りしが河野が後ろ築地とて後の
世までも称しける扨械船の押来るを今や遅しと待ち居たれども
左右なくも寄ざれば逆寄にせんと早舟で数艘の敵船にひしと
漕つけ鉄の鎖を掛て艫舳を合せ歩行の板を敷並べさながら
陸路のごとくして其上には弩を多く備へていとも堅固に見えぬ
ぬれバ其ところの手勢をまって大将の旗本まで斬て渡り
合んと思ひ来りしが何ハせんと思ひ煩ひ神力ならでハ叶ひがたしと
一心に念じけるを日本國中大小の神祇別しては氏神三嶋
八幡大神神擁護を垂させ給へと肝膽を砕きて祈る折しも
沖の方より白鷺一羽飛来りて檣に立たる矢の中ほど



通有高名の図



烏羽もて作る征矢一筋纏て空に翦揚るがやがておちる
敵船さして翔りゆき多くの船を過りて一の大船の上に落し
来りし大将の乗る船と見えて旌旗は風に靡きし金銀
を鏤め磨飾りたる櫓重々として構へたるは尋常の船にて
あらざりけり御方の軍兵是を見て其形勢の不審なれど
固唾を呑で居たりしが通有きつと思ひ定めたる是則三嶋八幡の
大神の加護なりし敵の大将此乗る船を我にまさしく賜ふなり
此上は何ぞ遅々すべき急ぎ漕寄討取らんとて伯父伯耆守
通時と諸共に二艘の船を漕連て敵船さして進んだり御方の
人々是を見ていづれも驚き怪しみけるが眼にあまる大軍に

僅二艘の船もて不敵にも漕よし事なれバいかに心は猛くとも
討るゝ事は必定なり争で武功のなるべき若は心の狂ひしか
あるひは魔の憑しかと頻に是を制すれども空嘯きして聞入れ
ざれば揉に揉んで漕立たり敵船にて是を見て敵方の大船ぞ
拗もせず漕寄せ来るは降参の使にもやとおもひけむ矢をも
一筋も射ず然して其船の様を見居たる様子なり賢くし
進むべしと多くの船を乗越て彼法度なる賊船近く漕寄
せたりき其の口上にて是に使にもあらざれど御使は初めて仰天しけん
弩毒矢を放ちけれ共寄せじとこそは防ぎけれ通有何かは
猶豫ふべき大勢へ乗んで矢を放て賊徒を四方より射すくめ

されバ屈竟の郎等数人射伏られ既に此所の伯父通時も
薄手を負ひ我身も左の肩を討れ弓引事叶はざり
けれど更に鋭気を失はず猶も進んで帆柱を敵船へ
打懸て猿猴の梢伝ふが如く一番に乗移り其侭大太刀振
かざし高所に立たる其手は副将と覚しきを唯一太刀に斬伏
たり百餘人の郎党若党八人ともろともに打取て
面もふらず斬入て伯耆守通時も聞ゆる大剛の兵なれバ手もてぞ
大長刀を水車に廻し先に進んで羅る獅子奮迅の勢ひに
辟易しつ近寄得ず敵こり逆鱗に通有も誓ひしごとく
大将を討んとひた切に切る太刀先に向ふ賊徒は算を乱して

斬伏て只今ぞ奥に打漂ふ玉の冠をかうむりつゝ天晴大将と
見えたる男の莫耶の剣打振りて通有を討んと目がけ渡合ふに通有得
たりと殺す所を数十合戦ひしが精神また屈して英雄一敵の剣を
打落し押ならべて組伏難く是を生捕り織続の類船
是を見て我もくと乗移り戦ひ戦ひんとする折しも悪て船を放ちし
焼草の炎燃ん/\と燃上り黒烟天を覆ひぬれバ己が船を焼
せじと秋船く四方へ漕開きぬ通有下知して手勢を団めながら
船に乗移り勝時揚く漕帰る其武威におそれ怨来らん数ぎ
も斜ち得ず殺て追ふ者なかりしかバいと静くと御方の陣所へ
乗寄り伯耆守通時を討れ烈しく戦ひて太事の深手

数多負てれど帰る船中にて死したるハ惜むに餘る事なりけり
西有数の郷の手に敵を忍びて我生捕し賊徒の中に云の生捕と
討死首を大将に首実検に入けりぞ其武勇を深く賞し生捕
の者共の問るに通有の生捕し冠を着たりしハ賊徒の大将
三人の中なる其壱人とぞや有るさて是ハ首を削て久方に居た郎
成後とか云ふ郷の手にあせて遠く京都へ上せけるが後にこそあるの紀
御感賞を蒙りけり実に潔き武士共西国に蒙着たこの事ぞ
こそ

高麗兵船待後聯事

扨も箏会にて秋田城次郎宗景を始めとして河田右部遠俊

安達次郎重綱旗軍監として下向せられし事なれバ薩摩国
守護下野守久親同久長豊前豊後守護大友兵庫頭泰長
筑前肥後両国の少弐三郎左衛門尉景資を始として九州の地頭
御家人等につぎて忠勇を先とし義戦を励まして防九の大城
の如くもせず毒矢の鏃も今を恐きとて防き戦ふ其の敵も文永の
戦ひとは事変り築地一重も破る清く数千の船を連環し
對陣をしく居すりに並て風聞せしごとく後軍の到るを
待つけて一手になりて攻んとの事なりし其賊軍の様ハね
見るて大友兵庫頭の嫡子刀禰殿人子弟をぐりて三千餘騎を
洲崎に陣せて押寄て手痛く攻戦し首級を数多取りけり

下松浦上松浦の者どもハ徒に敵を待とも寡しく寄来ねバいざや
是より押寄せて同じ死し一戦を遂げ討死せばやと云ひ立て
其勢凡千人ばかりを安楽肉にする他浦より漕出して敵打にこそまち
為敵は賊船を不意に討まして数多の首を挙て狼狽すれば
大将の御方ハやれ〳〵勇気を増して縦横無尽に切伏て彼
連環の陸地をぞおもふさまに追まくり〳〵いとど烈しく戦ひしく
一人ごとに賊徒ほど四五人ばかり討取て首数二千余を斬獲けり
あまりに烈しく深入し戦ひければ打据られども討死するもの多く
多く帰る者ことハはつかに数十人すは色ぎらめり九州
四国の兵どもおもひくに抜駆し鋭切を立帰さず何時も寄て

待つとても夥しき手柄もなし〳〵で関東武士の手並のほどを
みせんぞと秋田城次郎の手の者に早田雄丸若武者共新左衛門
十郎今井彦次郎財部九郎等敵船へ押寄て死傷を更に顧ず
死しき勇戦して賊徒数多討取ども本より続く兵なければ
討死もなく寡なかりしが蒙古の副将忻都洪茶丘高麗の大将
金方慶周県朴球等が合力す千人弐千余りの軍艦にて用心
厳しく備へたれども度々の軍に打負て其上夜討朝掛に
一手切の働きにさへ大将を討れしまま大船を焼立られ士卒の討死
夥しく船のみならず疫病流行して満船呆果て病付て死する者
又多し是を愁ひて賊将等本船に打集ひ高議して曰く

江南の軍兵と壱岐島にて相會して一時に王都へ責入んとせしが
其路程遠へ隔て我々のみ數十ヶ度の大戦し甚だもつて利あら
ずしていたづらに日を経れども兵粮ほとんど乏しからんとするに
疫病流行し病に侵さるゝ者おほかりしが總に義勢も盡果ぬ
只此うへは軍を收めて皈陣せんより外なしと軍議一决せんとせしに
金方慶頭を打振り許諾せずして曰く諸将は皇帝の命を請て
遠く吾邦の征伐に従ひ一島をも破る事なくして空しく皈陣せる
恥ずや其儀なほ叶ふべからずと荒らかに云ちらされぬれば忻都も
評議も止みぬ又十餘日を過しぬれど再び合戦を望ましめず
方慶なんぞ云ひおかるゝ先國にいふべからく聖旨に背ひ

援く時をうつさず來ん見えん故に三月の糧を齎したれば
今一月あまりは支へぬべし南軍頃は後るゝも今日明日の程
に至るべし相會して戦ば一時に孤島の小夷を討平げん
事囊中を捕るよりも易かるべしと席を打て利害を解き
けまさず賊将是に機を得て軍を留て議稍止けれど今は
勢ひて戦ふ又是までに敵する事なく討死する者多きのみにて
打續ぬべき事あらじ後軍の來るを待終るまでは戦を止めさせて
纔にめぐりと遠の澳に退きて鷹島に掛りて夜うち朝駈の
用心を嚴しくぞ備へける此方の後軍是をみて糧も鷹島に
押寄て勝負を一時に決せんとてこゝろみる矢竹に早れども流石に

軍船多くの杯ハ無念の齒嚙かみならし空しく日數を送りけり
去程に蒙古の惣大將阿剌罕范文虎ハ江南より發艦して大洋を
押よせ前隊れ軍勢と壹岐島に會合し一手になりて王都へ
責入んと約したる事なれども今や本陣ぞんとするに臨んで
阿剌罕俄に病を發して醫療ほどこし手を盡せども聊快氣の
躰もあらざれバ出陣なりがたけれバ改めて阿塔海に命じ征東
將軍として惣大將に代らしめたり阿塔海ハ王命を蒙り
た移事なきを軍の支度を設んと時刻を移さず調へし
かくも怨や角と頭におくれて稍々六月の末つかた江南を發し纜を解
帆を揚て走らせ流る七月の末つかた平戸島に着ぬる侍に

まちたる前隊の軍勢遥に是を見付しく喜び勇みて迎へし
後軍の賊船も平戸島には船ならべ風を衝き浪を割て
鷹島浦さして押渡りぬ其惣軍凡十万余人兵船三千五百余艘
海も狭きまでに漕来て實に凄まじくこそ見えけれ

惣軍覆滅の事

扨も鎌倉には筑紫の早打おひ／＼に到来して續軍の趣
達しぬれども後軍の賊船以前に来りし其勢凡卅万人余にて
戦艦に取乗り押寄る風聞の西國にそれと聞えぬれバ宇都宮
左馬頭貞綱に六万余人の中國勢を引率せしめ實政の援兵
として西國へ下向せしめられ君ハ上大事に及ぶ時ハ本院 後深草上皇

新院亀山天皇ハ東國へ御幸なし奉り鎌倉ニおゐて御出家を遂させ
給ひ今上後宇多天皇 東宮伏見天皇ハ幕府より軍兵を発せ御守護
し奉り西六波羅の軍勢ハ西國へ下向せしめそれぞれの要害を守り
し其配所を定められてありけれバ禁廷はじめ仙洞よりもさまざまの
御祈祷仰出さる伊勢石清水加茂春日平野松尾稲田を始め
二十一社の御神をはじめ及び神名帳に載る所の三千七百五十
餘社へ奉幣祈願を凝されて諸國の山々寺々に至る迄僧に
勅せられ大法秘法を修せしめけり斯叡信を傾けまして猶
其上に凡そ祝ひたまはん事を欲したまひ新院ハ八幡へ御幸なりて
自ら奉幣しくて御祈願を遊ばされ又今上ハ七月朔日御幸

行幸ましまし伊勢の大宮に中御門大納言経任卿を勅使として
發遣遊ばされ其時の御祈願には我御代にしてかかる乱あらば
御身を以て此日本の損にかはるべくハ御命を召さるべしと御手自書せ
たまひけるとなり大宮院信子是を聞召ていとあるまじき御事なりと
諌め聞えさせ給ひぞ是理に哀なる禰宜が鼓の音につづき笛竹の
音に聲を合ひ謳ふ乙女が舞の袖まで御代を祝たまはん
ところに諏訪の湖の上より五色の雲西に棚引き大蛇の形に現れ
首尾を定めかねて西に向ひて飛と見えし八幡の御寶殿の扉
自から開きて馳違ふ馬の響の音虚空に満ち日吉の社の神鏡
鳴動し小守勝手の社も諸の楯自から立て敵の方に轉ぶ

だり彌靈鐘の功しるしなきのみならず頼もしくこそ見えにけるかくて
筑紫には蒙古の惣軍勢おびたゞしく鷹島にのぼりぬるぞ松浦の沖ハ
埋立て陸地となし旌旗の山を築けるごとく雖に射れ十万余人
官軍なれども殺伐至懲れ凶賊なれハ死を知らざる悍勇強く
戦ひ労れし菊池を存けれバ軍兵大に英気を発し此
日頃の敗北の返報をして呉んずと軍器を調へ支度して小躑を
しく喜んだり御将ハ常に船に寄集ひ軍議を凝らし指揮被
宣弘安四年閏七月朔日朝まだきに小船を押出し処々の
海岸へうち向ひ一手限りの勝負を決して一時に水城を蹂破せ
諸家の戍卒を跳散し速かに進んで王城へ責のぼらんとぞ

議しけるが斯まで諸軍へ使船を以て右の趣を達すれバ一同に
勇を立勝まじとして押寄せんと鏃に毒矢擢楯手楯の軍器
兵粮悉く支度して暁るを遅しと待程に其日ハ七月晦日
にて一天晴り晴渡り沖つ白浪閑かに黒の光に赫き合ひしく
さすがや潮路の末見えて穏かなりし空の気色にはかに怪しく
捲舒て一群の黒雲立出るとみえしが雲の中より鳴動して
雲渡りける声ありて硫黄の香空に満ちなバ何事やらんと驚く
間もなく暴風烈しく吹起り雷鳴はためき電光激発し
逆浪忽ち天に漲り沸騰乱漏して暴擾されば坤軸も摧け
はく天柱も地に落ぬ斗りし其騒しさいはんかたなかりけるも

寇軍覆滅の圖

文永の度に寇来りし異賊等の今又是に百倍して到る神変に
出逢ぬまゝぞ魂を失し魄を奪れ瞑眩顛倒して狼狽する
よりも云ぞなき数万艘の軍艦兵船檣折て楫砕け舷椛くだけ
艫崩も激浪に破れて又震雷されバ救ひ合ふ術もなく
固より逃るべき方なきまゝバ十四五萬の賊軍等悉く波濤に溺れ
浮ひ沈みて苦しミ死ぬさばかり廣き海原も死骸を以て
埋めをれバ死人の上を蹈狗し船や筏を用ひずして徒歩に洗足
にて吾国へも渡りまぬ程くなる㐂あり誠や此年ごろ日本
國中伐人壊にせんと計りしにあらぬ蒼海を埋める神罰の程
思ひしるべし文永の度の神風も是織一旦退らんとて陸を引揚ひ

持船に乗るや否や海荒出し船筏砕きぬ時に又此度を蒙古
蛮漢高麗の賊軍惣大将も雑兵も打れて得べき用なくして採ひ
採ひし其日を待く術なく顛覆せし兇徒ひふし天神
地祇の御威徳我国擁護の神威力ある貴しやあるるなるや
此神力誌さハ今更云ふも愚なる事也

風社宮號勅許の事

かくて異賊の船どもハ残りなく打碎れしを中ニは常に
去らく浪に打揚られ幸ひにして命助り崩れ残りし船筏
求めて三萬人計集りて先鋒浪に相集り其所にて船を修覆し
て逃帰らんとはかりける大将范文虎自ら堅好の船を撰んで

中川端にて斬罪し其屍を結ひ繋ぎし其首を晒しけり首数多
けるぞ山のごとくに打積て其儘に捨置たりしが残る兵の
軍兵を以ふして免まけん海を乗し其のあまて討死凡七千余人
共に残りしとぞ蒙古の賊軍十万餘も麗盡すぞ忍ぶける其中蒙古へ
帰りし者ハ千闘莫青呉万五といふ者三人のみなりしとぞ都や
諸社の霊験明徳にして何れとも知れざる紀中にも信濃国
諏訪の社ハ元より武神にあれバ其も御祈願にて揺らしに
七日に満てる其秋風にあらぬ神の戒を現じ給ひと夷賊も
拝みあけ降服して帰国の後其事総語りつたへけん
常州眺清縣といふ所に日本諏訪大明神の社とて勧請し今に

是に打従ふ士卒を捨て迯走りしが其行へハ知れざりけり扨も
御方ハ鷹嶋に夷賊らが寄集りしと聞て等しく少貳家の左衛門
尉景資を大将として鎮西の軍兵ども数百艘押寄て賊徒を
張萬戸といふ勇将を大将となし必死を極めて戦ひ合ふが
さて國へ帰らん今ハ遁つとも生延がたしと夷賊等も必死なれバ
極め命を限りに戦ひぬれバ御方も多く討れぬれど何にもして
敵し得ん散々に打なされ千人ばかりになりたりしが残る命なれ
をしけるにや引すゝ小舟に逃る事を免ぬれバ悉く生捕てぞ帰陣
ありける将卒を探索して隠れ潜し賊徒等を尽く
残らん打取ぬまて生捕の賊徒等を助置とも無益なりとして

いろ〳〵の厳重に祭禮を修せしめ給ふ扨も宇都宮の奉行
貞綱ハ實政の援兵として中國勢六万餘人を引率しす
ゝんで押行しが備後國にて筑紫の早馬に行あひて
事の様子を問ければ賊軍悉く討れぬれば京鎌倉へ
注進の為の使なりとぞ答へける去れど押て筑紫へ下向して
實政に面會し諸将士の軍勞を賞し又沿海岸の警衛備
堅固なるべく沙汰に及ばれ然して秋田城介泰盛と同く鎮西へ
帰りし事なり扨皇太神宮禰宜荒木田尚良豊受大神宮禰宜
度會貞尚等十二人起請文を連署して禁廷に奏聞しけるは
風宮の末社風の社寶殿鳴動する事やゝ久しかりて神殿より

赤き雲一群立出て山川を照して其光の中に怪しき姿の物
あらはれしが是只事にあらざるべしと御祈念を凝しけるに
降伏の神威を現じ給ひしぞ年比諸所の宝鏡を宣下
せられ給はんとぞ奏聞しける寛宥にも此度諸社の神位を増
加し数十万の兵船ども時の間に波の藻屑となりし
果さざりぬる事を思へあはすれば頼れまさく宮號勅許れ
宣旨を賜はりけるが久方の天つ御神の初めて皇御国を稼
此の奴ばらが覆し乱れ思ひ起して数千度渡來すれども何時も
いつも勝ぞあるべき強きあれども彼醜国の凶徒の病業なれば
又も寄ん事のあらんを寄せ来なば討るべく御扨

斯し守りぞ天つ神國の御神も又かく守らせ玉ふべし

萬職圖考五終 大尾

發行書肆

江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛
同 日本橋通二丁目 須原屋新兵衛
同 淺草茅町二丁目 須原屋伊八
同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
同 両國横山町三丁目 和泉屋金右衛門
同 芝神明前 和泉屋吉兵衛
大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
同 心齋橋通安土町 河内屋和助
同 心齋橋通博勞町 河内屋茂兵衛
同 心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門
京都數屋町通姉小路上ル 俵屋清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目 永樂屋東四郎